

乳幼児期の育ちと保育を考える

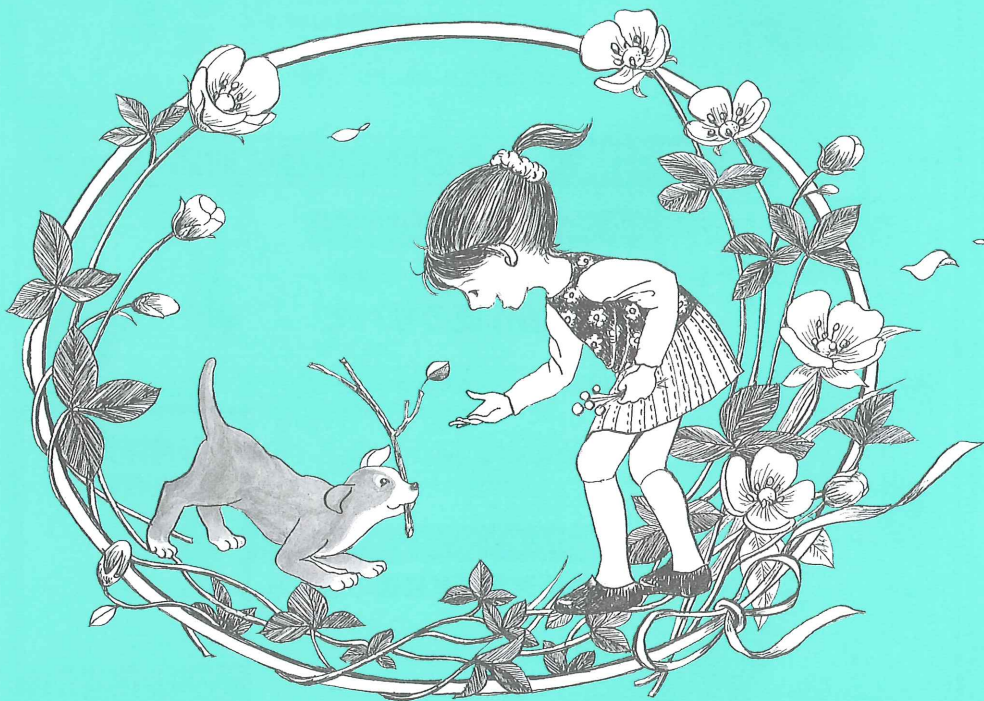
幼児の教育

特集

いま、倉橋と出会う5

「驚く心」

5
2010



新学期、これさえあれば安心!

幼稚園対策 実践の読み解きに最適!



36501

環境図や評価の視点など、項目が充実!

改訂2版 わかりやすい 幼稚園 指導計画作成のすべて

柴崎正行 / 編著

平成21年実施の「幼稚園教育要領」に完全対応。計画の書き方・教育課程や実践の理解を深めるためのポイントがわかる。

26×21cm 280ページ 定価2,415円(税込)

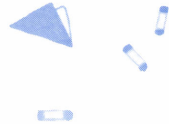
インデックス付きでわかりやすい!

改訂新版 幼稚園幼児指導要録 解説と記入の実際

柴崎正行 / 編著

平成21年に改訂された「幼稚園幼児指導要録」の解説と共に、記入する際のポイントをわかりやすく紹介。

26×19cm 152ページ 定価1,260円(税込)



36201

保育所対策 個々の発達過程に対応



10914

年間計画から日案まで見通せる誌面構成!

発達過程に着目した 保育所 指導計画作成のすべて

民秋 言 / 著

発達過程に着目し、0~6歳までの育ちの流れが一目瞭然! 見通しをもちながら指導計画の作成ができる。

26×21cm 296ページ 定価2,415円(税込)

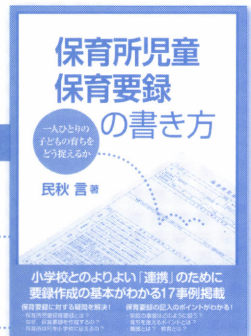
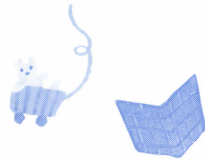
3つのパターンで記述を紹介!

保育所児童保育要録の書き方

民秋 言 / 著

一人ひとりの子どもの育ちを捉え、どう小学校へ伝えるか。保育要録の記入のポイントがわかる。

26×19cm 96ページ 定価1,050円(税込)



36210

幼児の教育

第109巻 第5号

目次

● 巻頭言 ●

経験と思考 テキストを解釈する子どもたち 鳥光美緒子 4

● 特集 ●

いま、倉橋と出会う 5 「驚く心」 8

「驚く心」という保育の思想 塩崎美穂 9

言葉のゆかいさ、おもしろさ 若月和子 12

◆ インタビュー ◆

倉橋惣三先生の思い出 村田修子 18

● 保育の創意工夫 (5) ●

ぞうりを履いた子どもたち 前原 寛 24

保育の中の静かな時間 西 隆太郎 28

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第109巻 第5号

● 園のくらしを育む2 ●

幼児と自然(2) — 待つことや智恵を学ぶ — 秋田喜代美 32

● 幼稚園の源流を求める旅 森有礼の第二次在米時代(3) ●

森有礼の第二次在米時代とアメリカの幼稚園 国吉 栄 36

「死んでいい」の遊びをめぐる 清水 哲

40

● 『幼児の教育』ネット公開に寄せて(17) ●

『幼児の教育』ネット散策の雑感 阿部真美子 46

● 保育の現場から ●

A夫の葛藤と変化 上坂元絵里 52

● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(41) ●

学内シンポジウム
「保育現場と協働して学生を育てる」を振り返って(1) 佐治由美子 58

卷頭言

経験と思考

テキストトを解釈する子どもたち

鳥光美緒子

『チコときんいろのつばさ』（あすなる書房 二〇〇八年）という本を、読まれたことがあるでしょうか。

作者はレオ・レオーニ。翼のない鳥、チコの話です。ある時、魔法の鳥に出会ったチコは、長年の夢だった金色の翼をもらいます。興奮して空に駆け上るチコ。でも、翼のないチコには親切だった仲間の鳥たちは、金色の翼をもった彼には邪険です。「金色の翼をもったからって、自分のほうが偉いと思ってるんだろ」と、仲間たちはチコに言います。仲間外れにされたチコは群れを後にして、困っている人たちに出会い、その人たちに一枚ずつ、金色の羽毛を抜いて差し出します。すると金色の羽の後には、黒い羽が生えてきます。こうしてみんなと同じ黒い翼になったチコは再び群れに戻ります。すると今度は、鳥たちは彼のこと



を仲間として受け入れます。

レオ・レオーニの諸作品を一年間にわたって幼稚園クラスの子どもたちと共に読んだアメリカの幼稚園教師、ペイリー註さんの実践記録をサブテキストにして、大学院の授業で、院生たちと一緒に、レオーニの作品を読んでいるのですが、受講者の一人Aさんは、どうしてもこのチョコの話には納得がいかないといいいます。

どうして仲間たちは、金色の翼をもったチョコを受け入れてあげないのか、みんなと同じじゃないと受け入れてくれないなんてひどいと憤慨します。

退職した小学校教師のBさんは、この物語をていねいに分析して、これはチョコの成長の物語なのだと言います。チョコは、たんに集団に戻ったのではなく、いろいろな人を助けることを通じて成長し、仲間たちの嫉妬心を理解し、それに配慮できるようになったのだと言います。

この物語で扱われている、個と集団の葛藤は、実際、幼稚園や保育園ではしばしば目にするものでしょう。そしてそれは、子どもたちの社会性の成長にとって不可欠の経験であるとも考えられているように思えます。子どもたちの社会性は、仲間関係の中で、わがままを通そうとした時にぶち当たる壁と痛みを知ること



で、学んでいくしかないものだと考えられているように思います。

この、個と集団との関係の問題について、まったく別のアプローチがあり得ることを、ペイリーさんの実践記録は示してくれます。つまり、テキストを、経験を振り返り思考する鏡として使うというアプローチです。

チコの物語や『フレデリック』『コーネリアス』等々を読んでもらい、演じ、絵に描くことを通して子どもたちはほしだいに、レオ・レオーニの物語に自分たちの抱える問題のエッセンスを見ようになります。個と集団にかかわる自分たちの悩みや葛藤を、レオ・レオーニの作品のさまざまな主人公たちに託して、語り、考えるようになっていきます。

経験し自ら痛みを知ること成長するという社会性の成長のあり方を、もちろん、ペイリーさんも否定するものではないでしょう。でもその直接経験という方法だけではなく、彼女のクラスの子どもたちは、自分の問題を物語上の人物の問題に照らして思考し、選択肢を模索し、判断するということをも学びます。

私自身はペイリーさんのこの方法に、強く惹きつけられるのを感じます。自分それは私が、教育の方法の問題を超えて広く日々の生活実践においても、知的に経験を振り返ることの価値を重視する傾向があるという個人的な好みに関連しているでしょう。



これを読んでくださっている幼児教育関係者の方たちは、社会性について考
え、討議することを促すペイリーさんの方法をどう思われるのでしょうか。

ペイリーさんの実践記録を院生たちと読みながら、子どもたちにアンケートし
てみたいという気分を駆られています。

ペイリーさんの本では、チコの物語を聞いた子どもたちは、ほとんど例外なく
チコではなく仲間の鳥たちに荷担します。チコはわがままでということです。ペイ
リーさん自身は、長年、本を書く教師であるという彼女自身の「個」が、教師仲
間の間で受け入れられなかった経験を振り返りつつ、この子どもたちの答えに
ショックを感じています。

ある程度自由に社会的移動をすることのできる大人と、社会的移動に関してお
おむね大人に従うしかない幼児とでは、個と集団についての考え方について決定
的な違いがあるのかもしれませんが。

これを読んでくださっている先生方のクラスの子どもたちだったら、どうチコ
の物語を読むのでしょうか。
(中央大学文学部教授)

注 Vivian G. Paley, "The Girl with the Brown Crayon". Harvard University Press.

1997.

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問いつけたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

おや、こんなところに芽がふいている。

島には、小さい豆の嫩葉わかが、えらい勢いで土の塊を持ち上げている。

藪には、固い地面をひび割らせて、ぐんぐんと筍たけのこが突き出してくる。

伸びてゆく蔓つるの、なんとという迅さだ。

竹になる勢いの、なんとという、すさまじさだ。

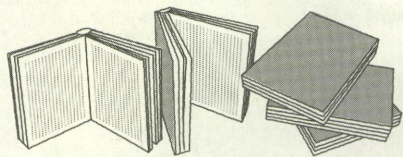
おや、この子に、こんな力が……

あつ、あの子に、そんな力が……

驚く人であることに於て、教育者は詩人と同じだ。

驚く心が失せた時、詩も教育も、形だけが美しい殻になる。

驚く心



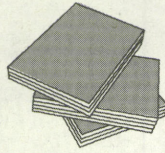
「驚く心」より保育の思想

塩崎美穂

誰にでも読みやすい『育ての心』

一九〇六（明治三十九）年、倉橋惣三は東京帝国大学哲学科を卒業した。その二十
年後、同大学を出て倉橋の後を継ぐようにお茶の水女子大学附属幼稚園園長を務めた
坂元彦太郎は、先輩倉橋を語る中で「驚く心」を引用し、主著『育ての心』を次のよ
うに紹介している。

『育ての心』は、「幼稚園や先生について語る文があると同時に、むしろ、母親や一般
の婦人に対して」書かれている。そのため、「いっそう平明で分りやすく、それでい
てきめのこまかい、情のふかい、極度に洗練された文章」になっており、「通俗的な
表面のうらに、彼のあたたかい人がらがにじみ出ている」。「いちばん人々に生まれ、
また幅広く多くの人々に影響を与えた」書、「現在においてもなお、そのまま生きて
通用する、ユニークな教育書らしからぬ教育書である」と^{注1}。

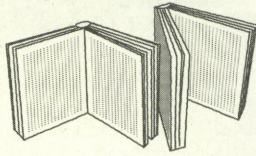


倉橋惣三とF・フレーベル

「日本のフレーベル」とも称される倉橋だが、しかし倉橋自身は、フレーベルの瞑想的な理論や象徴主義的な方法については批判的で、「自分は心理学者であるから、フレーベルのロマンチックな世界観や人性観には理解できないところがある」と述べている。このように心理学者として科学的であることを大事にした倉橋だったが、一方で、彼が心理学だけで保育をとらえられるとは考えていなかったことも広く知られている。坂元も、倉橋とフレーベルの両者には「共通のもの」があると言っている。^{注3}

確かに、子ども自身の能動性を尊重した倉橋とフレーベルは、「子どもの生活から出発する」という新教育の思想において、つながっているだろう。ただ、新教育の思想そのものが、科学としての保育研究とロマンチックな子ども観、あるいは、子どもの可塑性や可能性に人類社会の進歩を重ねる教育思想と子どもが自然のままであることをことほぐ子ども中心主義的思想など、さまざまに交錯する思想潮流の中で生成してきた重層的な思想である。こうした新教育思想の重層性として、時に矛盾をはらむ考え方が、倉橋とフレーベルの言説には含まれることがあると考えられる。

矛盾をも内包する厚みをもった倉橋やフレーベルの残した保育の思想は、後に津守真が志したような「子どもの世界そのものに対する驚きと関心」^{注4}を忘れず、「人間としての子どもに対する尊敬と、異質な他者の世界に対する知的な関心をもちつづけ」^{注5}



る人間理解の体裁をもって、保育実践のうちに存在し続けている。

形だけの美しさへの批判

「驚く心」は、一九三一（昭和六）年四月の『幼児の教育』（第三十一巻第四号）に掲載された。幼稚園令制定から五年というこの時期に、一般の人々に伝える保育論を語り、保育の裾野を広げた倉橋の功績は大きい。しかもここでの主張は、「おや」「あつ」と、子ども自身の育ちに驚くことの重要性であり、驚く心を失うことは、形だけは美しくとも、中身のない殻のような保育になってしまおうという懸念の表明であった。保育者は、専門的保育者として多くの子どもにかかわる中で慣れやノウハウを身につけていくが、そうした習慣や技術を戒め、日々、目の前の子どもにも驚く実践を重ねる大切さを示唆している。保育という営みは、日常的に山や畑で見られる草木の生命力に対する畏敬の念になぞらえられるたぐいのものであり、専門家の唱える難しい保育理論のうちにあるわけではないという倉橋の姿勢も、ここには読み取ることができよう。

（お茶の水女子大学非常勤講師）

注

- 1 坂元彦太郎『倉橋惣三・その人と思想』フレールベル館 一九七六年 p. 131、132
- 2 同前 p. 137
- 3 同前 p. 138
- 4 津守真『子どもの世界をどうみるか』NHKブックス 一九八七年 p. 195
- 5 同前 p. 204

言葉のゆかいさ、おもしろさ

若月和子

驚く心は、保育のスタート

保育の中で、子どもの言動に「おっ！ そう思ったの！」と驚くことがよくあります。次には「すごい！」と感激や感動する心がやってきます。特に、子どもたちのゆかいな、おかしな言葉を拾い記録することは、「仕事が楽しい！」と思う場面の一つです。驚く心をもって、保育は日々始まります。

一方、保育室は狭く、環境整備や生活を進めるた

めに悪戦苦闘している保育園の現状では、保育を運営するための「真剣勝負」も多くあります。余裕がないことも少なくありません。自分の思うような保育をしているのか、いや、でもこの状況下ではこれ以外にやりようがない、そんな毎日です。こうした余裕のない時には、子どもたちへの驚きが、自分への失望や疑問の心になるのも確かです。倉橋が言うような「美しい殻^註」になる余裕さえないのが現状です。しかし、保育とは、どんな時にも子どもたちの

成長と共に形を変えて展開するものであり、私はその中にいる自分を発見し、保育を楽しんでいます。

そして、「私たちは人間同士だ」と熱く思うのですが、それは大げさなことでしょうか。

二歳児クラスの流行語

子どもの育ちを継続的にとらえる保育実践ができるように、二歳児クラスでは三人の担当が、「リズム」「製作」「ことば」の分野をそれぞれが分担して実践しています。私は「ことば」を担当しているのですが、記録をとりながら、二歳児クラスの子どもの言葉に対する興味や、子ども同士でコミュニケーションをとろうとする姿のゆかかさ、おもしろさを実感しています。

年間の保育反省に入れた、①流行語大賞、②言葉で遊ぶ、③手遊び、④家庭からの反応、の中から、その一部を以下に紹介していきます。

流行語大賞

()内は子どもの気持ちと解説

四月「ママお仕事、パパ会社」

(泣かないで待ってればママはお迎えにくるよ)

五月「ばかって言ったら、自分がばかだよ」

(ばかって悪い言葉だよ)

六月「大事！大事！」

(先生の物にさわっちゃだめだよ)

七月「怒ってる？」「怒ってない！」

(怒ることはいけなことだから、聞かれると「怒ってない」と必ず答える)

八・九月「おもちがいのとんちんかん」

(ダメと言われるよりダメージが弱く、非を認めることができ)

十月「ばか女、カバの結婚まだ早い」

(出所は不明。他愛もない言葉遊びなのでしょ)

うが大人からするとちょっと困ったものも多
いのです)

十一月「ママ(迎えに)来ない!」

(おまえは悪い子だから、ママはお迎えに来な
いよ)

右記はおおまかですが、月ごとに子どもたちの中
でよく使われた言葉です。その時々の子どもたちの
気持ちにぴったりで、「流行語大賞」としてクラス
便りに載せたり保護者に紹介したりしてきました。

四月は新クラスになって、担任も一部替わり、新
入園児も進級児も奮闘しています。登園時に泣いて
いる新入園児に、「ママはお仕事でパパは会社に
行っているから自分たちは保育園で遊んでいるの。
だから泣かないのよ」という気持ちを進級児が話し
ています。これは進級児の気持ちの表れでもあるの
ですが、担任が言うのとは違い、友達が話すのを聞

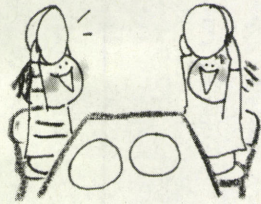
いて新入園児もそれを「ああそうなのか」という顔
で聞いています。おもしろいと思うのは、「ママは
お仕事」で「パパは会社」でなくてはいけないこと
です。ちよつとふざけて「ママ会社、パパ仕事」と
横から私が言ってみると、「違う!」と厳しい顔で
否定されました。会社と仕事のイメージが違うのか
もしれません。

そのほかには、「これはいけないだよね」と思
う子どもの気持ちが多く表れ、担任も「そうだね、
そのとおり」ということで、「大事! 大事!」や
「おおまちがいのとんちんかん」などの言葉を使っ
てきましたが、最近では友達に対して大きなダメージ
を与える「ママ来ない!」が飛び交っています。け
んかやトラブルが起きた時に、おまえはいい子じゃ
ないからママは迎えに来ないのだという意味の言葉
を発することで、トラブルがエスカレートしてしま
います。

二歳児クラスの子どもにとってママは絶対的な存在ですから、言われたほうは躍起になって「ママ来るー」と反発し収拾が付きません。けんかの両成敗を避けて「パパが来るんじゃない？」と言ってみましたが、案の定、効果なしでした。こんなに日本のパパの存在は薄いのか……と思いましたが、ともかく、ひっかきや、かみつきになる恐れもあるし、この辺で風向きを変えたいと考えます。室内電話を使って「○○さんですか？ お仕事中ごめんなさいね。今日ママお迎えに来ないってほんとうですか？ えつ、お迎え来る？ みんな、お迎えに来るんだってー」とお茶を濁してみました。が、もちろん、これは根本的な解決にはなりません。両者ともムツとした顔つきをしていて火種が残っているのがわかります。根は深い。担任ごときの力の及ばないすごさを感じる場面です。

また、私は言葉の力を借りて生活をスムーズに楽

しくしたいとも考えています。いま、ひそかに流行させたいと思っているのは「ピッカピカ」です。というの、クラスの子どもたちの食事が少なく、家庭では自分で食べずに口に入れてもらっている子どもが約半数もいることについて、何とかしたいと思つてのことです。二歳児クラスの残飯は多く、「鶏や家畜を飼って食べてもらいたい」「もったいない」と思うことが少なくありません。そして何より、子どもたちにとって食事が楽しい時間であつてほしいのです。そこで、量を減らし介助もしますが、自分からお皿をきれいにすることを目標にできないだろうか、と考えました。個人の適量を把握することは結構難しく、減らし過ぎて「疑問！」と他クラスの職員から言われたりもします。でも、空になった自分のお皿を持ち上げて「見て、ピッカピカ」という声飛び交うようになるのを見て、「これだー」と思いました。「ピッカピカ」と言いながら、「きれい



なお茶わんになったね

「洗ったみたいね」「嫌いなものでも少しは食べた

ね」と担任に認められ、

自信をもった子どもの声

になっていくといいなと

思っているところで、今後に期待をしています。

ただし、同時に、その声が増えたり減ったりして、

「いいから食器を置いて」といって、みんなで言うのと、う

るさいわね」とも思ったりしています。

言葉で遊ぶ

食事時間に子どもの「いただきます」に対して

「どうぞ召し上がれんちゃん」と言葉の最後に名前

を加えて応えようと、本人は、「違う!」と不快感を

あらわにしています。小さい声でも聞き耳を立てて

いるようで、「どうぞ召し上がれ」と言うのと、目を

パチパチさせて安心した様子です。しりとり的な楽し

しさを感じてもらえるかと思いい、今度は「どうぞ召

し上がれんこん」と言ってみると、やはり納得しな

い顔つきです。

きまじめな二歳児の特徴が出ているように思いま

すが、三歳になった子どもにはこのジョークが通じ

てニヤニヤして聞いています。自ら「召し上がれん

ちゃん」と言ったり、仲良しの鈴木裕香（仮名）

ちゃんと杉本亮（仮名）ちゃんの名前を取り替え

て、「鈴木亮ちゃん」と言うのとニヤニヤして楽しむ

ことができるのです。

また、はさみ使いの上手な子に「上手! うま

い! おいしい!」と言うと、二歳児は「違う!」

（まったく先生は本当にしようがない!）と不快感を

あらわにしますが、三歳の子どもは、「また先生の

冗談が始まったよ」とニヤニヤするのです。

手遊びにしても、「トントントンネルくぐった

ら、ア리가ア리가カニになった」を「ミミがミミが
ゆうちゃんになった」と、家庭では自分と友達の名
前に替えて歌い、楽しんでいると報告されたりもし
ています。また、給食が大好きな子どもが自ら「京
浜東北線の大森〔大盛り〕にしてください」と言うの
は、上級のジョークではないでしょうか。こんな時
は、「共感」とひと言では言い切れないほどの子ども
との「仲間意識」を私が感じさせられる瞬間で、子ど
もと肩を組みたくなくなるほどうれしくなるのです。

家庭からの反応

「子どもの言葉を聞いて驚きました」と、保護者か
ら伝えられることがよくあります。

- ・母親がリンゴの皮をむいていて「失敗しちゃっ
た」と言うと、「失敗は成功のもと」と言う。
- ・おしゃべりなママに対して「ママうるさい、
ちょっとあっちへ行行ってよ」と言う。

・返事をする時、「OK!」とか「了解!」と言う。
・嫌なことや間違ったことをすると、「今度やんな
いでね」と言う。

・「しつっこい! もうおしまい!」と言う。
・「お先に失礼!」と言って、走って逃げる。

しかも、これらの言葉は、どうやらどれも私の言
葉らしいのです。らしいではなく、不用意に使って
いる言葉も多く、反省することしきりです。イント
ネーションや口調がきつとそっくりなのでしょう。
先日も、保護者の方とその話をしていて、「ごめん
なさいね、お国(中国)の言葉ではなく、津軽弁を
教えちゃったかしら?」と笑い合いました。

それにしても、言葉の使い方に対する二〜三歳児
のセンスやキャッチする力には、驚ろ木、桃の木、
山椒の木(?)。とても感心させられる毎日です。

(東京都公立保育園)

注 詳しくは本誌 p.8 『驚く心』引用文参照

インタビュー

倉橋惣三先生の思い出

語り手 村田 修子
聞き手 浜口 順子

佐治由美子

村田修子^{みちこ}先生は一九四一（昭和十六）年に東京女子

子高等師範学校（女高師）の体育科に入学、卒業後

昭和二十一年から四十年間、お茶の水女子大学附属

幼稚園の教諭をされました。倉橋惣三は同大学を昭和

二十四年に退官し同時に附属園長の任も終えます

が、村田先生は、その数年間を学生・教諭として倉

橋の下で過ごされ、本誌四月号でインタビューした

堀合文子先生と同じ時代に附属幼稚園の保育を育

み、その後は洗足学園短期大学附属幼稚園で園長と

してご尽力され、保育者養成にもあたられました。

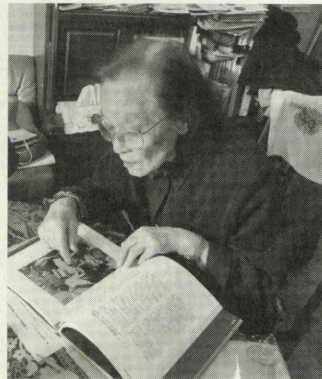
●大好きな倉橋先生

浜口 今日村田先生に、お茶の水の附属幼稚園時代のことや倉橋先生の思い出などについて語っていただきしたいと思います。

村田 ええ、あのね、大好きなのよ、何しろ。倉橋先生が。本当にね、素晴らしい方でしたね。

浜口 直接お会いした雰囲気というのは、どういふ方だったのでしょうか。小柄な方だったそうですが。

村田 小柄だね。ごちそうが大好きな感じな……。



ぼちゃぼちゃとしていて。文句をおっしゃるようなことはなかったですね。

佐治 倉橋先生は幼稚園にはよく来られましたか。

村田 倉橋先生は教授も兼ねていらっしやいましたから、幼稚園に見えるのは一週間に二、三回でした。お話をうかがうのが楽しみでしたね。

佐治 お子さんとも遊んでいかれたのですか？

村田 ええ。でもね、（私が存じ上げていたころは）大体において足がお弱かったからね。みんなにぶら下がられると危ないのよ。だから「先生、たすけてー」っておっしゃってね。

佐治 それでお写真では座っておられるんでしょうか（附属幼稚園の記念誌『時の標』の写真を示す）。

村田 それだけじゃないと思いますよ。やっぱり子どもと対等に、同じ目の高さでね。

浜口 附属幼稚園の保育のやり方というのは、そのころから、朝登園するとすぐにほとんど自由に好きないように過ごして、お弁当を食べて、午後また少し

遊んだらお集まりをして帰る、という一日の流れだったのでしょうか。

村田 ええ。クラスの色彩っていうのはありましたけれどね。

浜口 先生方同士の話し合いというのは、どのようにされていたのですか？

村田 それもありましたけれどもね。「ここがわからなかったけれど、それはどういうわけ？」とか聞いたりしてね。

佐治 そういう話し合いをする時には倉橋先生も入って一緒になさったのですか？

村田 そういう時もありましたね。及川（ふみ）先生が入られる時もありましたしね。……でも倉橋先生の時は楽しかったわね。特別に先生がどうこうしたっていうんじゃないけれど、何となくおらかな空気が漂っていたように思うのよね。倉橋先生がちゃんと及川先生のことを立ててね、及川先生のほうが偉いような感じだったわよ。

浜口 村田先生は、戦中、敗戦、戦後復興にまたがる時代の倉橋先生を見ていらしたわけですが、そういう張り詰めたものは感じましたか？

村田 いえ、あんまり感じなかったですね。

浜口 じゃあ、いつも穏やかで……。

村田 ええ。そんなにね、深くお話しする方じゃないんですけど、幸せなことにね、私は先生の中野のご自宅によく伺いました。倉橋先生の最初の男のお孫さんがね、うちの娘と同じ日（昭和二十四年八月二十五日）に生まれたの。

佐治 そうですか！

村田 こっちが女で、あちらが男。だからね、倉橋先生が比べっこするのよ！ 私は初めての子ですしね、そんな比べるなんて思わないけれどね。先生は「こっちはこうだけれどね、そっちはそんなことまだできないかもしれないけど」なんて、笑うんです。けれどね。女の子のほうがどうしても大きいんですよね。そうするとね、残念がるのよ。負け

たーって言ってるね。それがうれしいわけじゃないけれども、何となくね。

佐治 お忙しい中で癒やされていらしたのかもしれないですね。

浜口 奥様はとっても楽しい方だったそうですね。

村田 本当に楽しい方。あの方は東京府立第一高等女学校卒で、私の先輩なんです。そういうことがあつてよく話しましたね。

浜口 先生は体育科にお入りになったということ、初めから幼稚園の先生を目指しておられたわけではないのですか？

村田 ええ。私は一人っ子で、娘も一人。だから、ちいちゃい子ってよく知らないのよね。でもそれが子ども好きになったのよね。それはとってもよかったですと思う。女高師にいた時に、幼稚園を知ってはいませんでしたね。そんな魅力はなかったです。でも倉橋先生の授業に好んで出ていましたね。いつも、一番前に行つて聞いてね。

● 附属幼稚園で

浜口 先生のお宅のお庭のように、幼稚園のお庭にもたくさん植物が植わっていますけれど。

村田 そうそう。お庭のね、(高台の)山のほうへ上る傾斜の所を子どもが使えるようになって考えました。ああいう木々の間を歩き来することは少ないですもんね。坂があると何となく上りたくなるのは当たり前なんですよ。

浜口 たとえば、秋にはイチヨウの葉っぱでどんなことをされましたか。

村田 あれをたくさん集めて子どもにワーツとかぶせるとね。うるさいけれどもうれしいのよね。そういうことが自分の経験でとても楽しかったからね。自分が楽しかったことって子どももやっぱり楽しいだろうってね。

浜口 あの当時、お茶大の学生さんが幼稚園の朝のお掃除をしていたということはありますか？ 実

習の一環で、朝早くから来て。

村田 ああ、そういう時もありましたね。そういうのが実習期間の初めのころとくつついて、そこから始まつたり。

浜口 学生さんが実習する姿で、印象に残っていることとかはございますか？

村田 いろいろありますけれどね。実習をとっても好きな人と、そうでない人は来る回数が違います。休みの時間があれば来るといふ人もいました。

浜口 いまの教育実習と比べると、かなり自由に入りできたんですね。

村田 そうなの。配属の組は決まっているから、先生も安心してね。そういうのっていいのよ。

浜口/佐治 いいですね。

村田 だって学生さんの空いた時間っていうのは、その人によって違うでしょう？ だからその都度先生に届けを出して来る人もあつたし、ぴよこんと来る人もあつたし。

●保育とは

浜口 四十年の中で、子どものかかわり方について、だんだんわかつていらしたことはありますか？

村田 ありますね。それはいっぱい。

浜口 どんなことでしょうか。

村田 放つておく、っていう言い過ぎだけでもね、曲がりそうになった時を見計らつてこうやってピッとすればね。

浜口 なるほど。あまり手をかけ過ぎない。

村田 あんまり口で、かけないほうがいいわね。

浜口 心で、かける。

村田 もちろん心だけれど、ピッとやって、ニコッと笑つてやればいいんじゃないかしら。やっぱり笑顔っていうのはいちばん効くんじゃないかしら。

浜口 子どもを遠くから見守る保育と、一緒になつて遊ぶのと、先生ご自身はどちらが主でしたか？

村田 私はその中に入つてしまつて。

佐治 たとえばさっきの話のように、イチヨウの葉っぱをワーツとかけたりするのは、本当に子どもと一緒に遊ぶ気持ちがないとできないですよ。

浜口 逆に、いまは離れていようという時は？

村田 ありますよね。やっぱりその子がやろうとしていることがもう見えて、安心していられる時にはね。安心していられないとやっぱり心配で。ずっと見つめていたりね、ちらちら見ていたりね。チョコッと手を出したりね。

佐治 子ども同士で遊び始める雰囲気になったら、それまで一緒にいてもスッと離れてみたりとかなさるのでしようか。

村田 そういう時もあるし、一緒になつて中に入つて遊ぶ時もありますね。そのほうがいいと思えばね。その時の判断がつくかつかないかというのは大きいでしょうね。

浜口 それはなかなか学生さんに教えられることじゃないですね。

村田 だからそういう例があった時に一つそれをつかまえて、ここは今日はそのままにしちやっただけで、違うふうにもできたかもしれないわねって言ってあげればわかるかもしれない。そうやった時にどう変わってきたかを一緒に考えてみるのもいいわね。

浜口 誘導保育という言葉がありますけれど、かなり意識していらしたんでしょうか？

村田 意識してはいないけれどそうなっちゃうんですよね。何か関係がつきそうなおことが出てきてね、それをさっきのこととつなげて……とかね。

浜口 やってみたら、後からあれは誘導保育だったといえるような感じですか？

村田 そういう時もありますよね。子どもがしていたことをうまく流れれば、そこからどっちにでもいけるようになることもあるんです。そうするとああうまくいったなと思ってね。あそこでこうしなければよかったのかなって思ったり。子どもには言わないけれどね（笑）、成功ばっかりではないわね。

浜口 そうすると、一つの流れがあつて、子どもが参加してまとまったものになっていくということがよく起こったということですね。

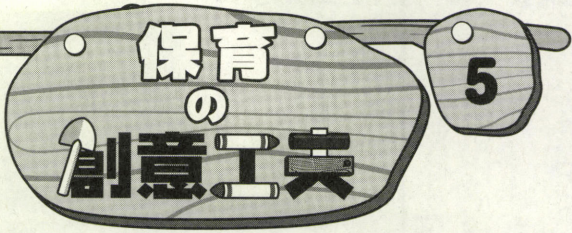
村田 そう。やった！ って思ってたね。ああこうなるのか、よかつたって。でも何としたって、こうなつてよかつたつて思えるようにもつていかないといけないんだからね。後悔ばかりしていたって仕方ないのよ。

* * *

都内にある村田先生のご自宅の庭には、折しも赤々と実がたわわに数十個なっている柿の木がありました。先生は「さあ、幾つあるか当ててみましょうよ！」と楽しそうに言われ、そこに保育者の村田先生の姿が重なつて見えた気がしました。玄関前の珍しい「キンギョつばき」の葉つばと柿の実をいただいて帰りました。

浜口順子・佐治由美子（お茶の水女子大学教員）

記録・金子未希（お茶の水女子大学大学院生）



保育

の

創意工夫

5

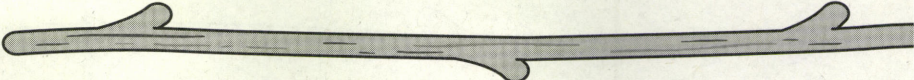
ぞうりを履いた子どもたち

前原 寛

五月のゴールデンウィークが明けると、気候は初夏の装いに移ります。さわやかな季節ですが、日によっては気温が30度近くまで上昇することもあります。ある年の五月中旬にそんな暑い日が続いた時、「ねえ、こんなに暑いから、もう夏になったのじゃない？」と五歳児に聞いてみました。そうしたら、「夏じゃないよ、だって虫がいらないから」と答えが返ってきました。

なるほど、です。気温だけを見て、暑いから夏だと私は言いましたが、その子にとっての夏は、ただ暑いだけでなく虫もいる季節なのです。子どもの季節感の細やかさと、大人である自分の鈍さを、思い知らされたものです。

そんな子どもたちの足元は、ぞうり(草履)になっています。ぞうりを履




き、園庭で初夏の陽光を浴びながら、遊んでいます。


私のかかわっている安良保育園には、いわゆる制服というのはありませんが、保護者にお願いでそろえてもらっているものが、幾つかあります。その一つが、硬いゴム製のぞうりです。

ぞうりといっても特別なものではないのですが、一般的なものとは少し違い、鼻緒がついて足底が硬くなっています。一般によく出回っているぞうりは、鼻緒がなかったり底のクッションがきいて柔らかかったりしているので、当園指定のものを保護者には購入してもらいます。どうしてぞうりにこだわるのかというと、足元からしっかり丈夫になってほしいからです。

現在の履物は、靴にしるぞうりにしろ、一体に高機能化しています。全体を包み込んでフィットしており、クッションもきき、足をしっかり保護しています。小さい時からこのような履物に慣れてしまうと、足そのものではなく、履物の機能に頼りがちになります。たとえば、エアクッションタイプの靴を履いていると、走ったり跳んだり飛び降りたりする行動も、靴の機能を前提にしてしまいます。自分の足の感覚がおろそかになりかねません。

それを避けるために、当園ではぞうりを使用しています。鼻緒がついているので、親指と人差し指でしっかりと挟み込まないと脱げてしまいます。底も硬



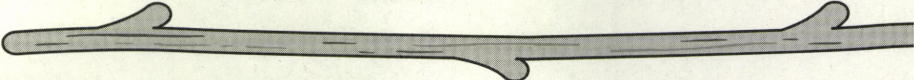


く、自分の足で衝撃を和らげる必要があります。子どもたちは、戸外ではこのぞうりを使用しています。毎日履いて走り回っている子どもの足は、しっかりとなっています。

そのことを裏付けるかのように、次のような発言をいただいたことがあります。近隣の小学校の運動会では、翌年の就学を控えた五歳児が、かけっこに参加します。園庭と違い、小学校の校庭はさすがに広く、子ども走りがいがあり、懸命に走ります。その様子を見ていた校長先生が、「この子は転びませんね」と言われました。これまで勤務していた小学校の運動会に参加する園児は、よく転んでいたし、いかにも幼い感じで走るのに、安良保育園の子は、転ばないし、走りっぷりがしっかりしているということです。

その話を聞いて、そんなに子どもが転ぶのだろうか、私のほうが意外でした。それで気をつけていると、ほかの保育園の子どもたちは、しっかり走る子もいるのですが、確かに転ぶ子が多く、全体にどこかひ弱な感じがします。ひいき目ではなく当園の子の走り方は、しっかりしているような気がします。ぞうりの効果があるのかな、と思うことでした。

当園では二歳児くらいからぞうりを履いています。早ければ、一歳児の子でも履いています。園で使用しているぞうりは履きやすく、嫌がる子どもはまず



いません。その年齢から履いている子は、四、五歳児になると、**ぞうり**が足の一部になっっているかのように活動しています。

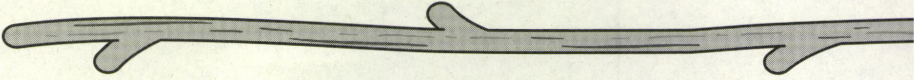
一方、三歳、四歳で転園してきた子は、**ぞうり**に慣れていません。**ぞうり**を履いていても、足の指に力が入らず、すぐ脱げてしまいます。また、足先に引っかけた履き方になっていて、鼻緒を挟んで走れるようになるのに、時間がかかる子もいます。そして、**ぞうり**を履きこなせるようになると、活動もダイナミックになっていきます。

もちろん、子どもに履かせるだけでなく、保育者も足元は**ぞうり**です。ですから、当園では、みんな素足に**ぞうり**で行動しています。ただ保育者にとつて、子どもと同じタイプの**ぞうり**がなかなか見つからないことが、悩みのタネです。ファッショ性を優先していたり、クッションなどの機能が強かったりして、不向きなものが多いのです。

このように足元の基本は**ぞうり**ですが、スパルタ教育はしていませんので、寒い冬も履いているわけではありません。**ぞうり**の使用は、春から秋にかけてです。

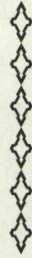
五月は、**ぞうり**を履いた子どもたちが、走り回り始める季節なのです。

(鹿児島国際大学准教授・二元安良保育園園長)





保育の中の静かな時間



西 隆太郎

子どもたちに導かれ、共に夢中になって遊ぶ時、ふと静かな時間が訪れることがある。

保育園はいつでも笑顔にあふれていて、普段はうれしく、時に悲しく、そして優しく、子どもたちの声が響きわたっている。片時もやむことのないざめきの中に、それでも私とその子と二人だけの間で、静かな時間を感じることがある。

初めて保育園を訪れたころ。それまでのように実習担当者としてではなくて、保育を学ぶために――

というよりは、多分、子どもたちと一緒に遊ぶために、だったのかもしれないが――ある保育園に通わせていただけることになった。園庭に現れて、まだ少し戸惑っている私を、子どもたちはすぐに見つけて、彼らの世界に誘い出してくれた。子どもたちは園庭を訪れる鳥に興味があるようで、鳥たちの話をしているうち、みんなで鳥になって遊んだりした。みんなが掛けてくれたビニールシートが、私の翼になった（次ページ写真）。

S. フロイトは、精神分析の自由な語らいを、患



▲「動きやすい服装」であってもなくても、子どもたちは遊びの世界に連れていってくれる

者の心の世界を共に旅することにとえた。V. アクスラインの『遊戯療法』には、「子どもが導いてくれる (The child leads the way)」という一節がある。いま、子どもたちはたとえでなく、戸惑える新参者の手をとって、彼らの世界への旅に導いてくれたのだった。

「おにいちゃん、こっち来て！」三歳のK君に手を引かれ、園庭中を駆け回っているうちに、私もいつの間にか無心に遊んでいた。K君は雲梯うんていの所に行って「ここにぶらさがってほしい」と言う。私がいって見せると、みんなは「すごい」と言って喜んでくれた。子どもたちは、「できるようにになりたい」「伸びていきたい」という気持ちでいっぱいなのようだった。

それを見ていた同じ三歳のH君も、雲梯に登りたくなった。柱に手をかけた後、私のほうを少し振り

返るようにして、はつきりと言葉にはしないけれど、私に支えてほしいらしく、どことなく切ない顔で私を見上げる。私に抱えられて雲梯によじ登ると、H君は本当にうれしくなる。うれしくて、「おサルさんみたい」と言いながら、キャッキャッと鳴き声を上げる。それから降りる時は、ただ降りるのではなく、自分の両手を使って自分の力で降りていきたいようなので、私も手を添えるのは軽くする。

「もう一回！」H君はどんどん登りたくなり、左側の柱から登れば今度は右の柱から、右から登れば次は左から、何度も何度も雲梯の上で「サルになった！」と鳴き声を上げ続けた。サルになりきったH君をあちらこちらと押し上げながら、私はこんなにも一心に遊んでいられることをうれしく思うと同時に、この興奮がどこまで高まっていくのだろう……とも、どこかで思っていた。

その時、雲梯の上で、H君はふと私の腕時計に気



▲サルになりきって遊ぶ時間は、いつまでも続くような気がした

づいて、「これ、動いてる……」とつぶやくように言った。そのデザインを、「かつこいい」とも言うてくれた。それから私の指輪を見て、「結婚してるの？」と尋ねた。こんな時、あまりうまい言葉も見つからなくて、「ああ」とか「うん」とか「ありがとう」とか言うしかなかったのだが、さっきの興奮は風が吹くように通り過ぎていったようで、ただ二人の静かな時間が訪れた。園庭ではみんなが遊ぶにぎやかな声もしていたのだろうし、さっきまではどこまでも興奮が収まらないように思っていたのだが、この時は落ち着いた時間が過ごせた気がした。この静かな時間の中で、人と人として、H君と親しくなれた気がする。

そのうちに、保育士の先生が声をかけて、みんなが集まる時間になった。「また遊ぼうね」とH君に言うと、H君は「ぜったい？」と何度も振り返りながら、みんなのほうに駆けていった。

うれしいこと、楽しいこと、悲しいこと——どんな感情も、子どもたちは体いっぱいを感じ、伝えてくれる。子どもらしさを失いかけた私たちには、その感情が抱えきれないこともある。高まる感情をどう受け止めればいいのか、その解決は、あらかじめわかっているわけではない。なだめてみたり、収めようとしてみたり、制止してみたりしても、自然が生み出す感情を抑えつけることはできない。そうではなくて、自然の感情を二人で一心に体験する中から、何か思いがけないもの、新しいものが生まれる気がする。心を支え、関係を深める力は、子どもたち自身ももっている気がする。

保育園では、いつも何かが新しく生まれている。まだ何かはわからないけれど、その新しい未来に出会いたくて、また保育園を訪れている。

(ノートルダム清心女子大学児童学科准教授)

園のくらしを育む②

幼児と自然(2) ー待つことや智恵を学ぶー

秋田喜代美


1 合わせること 待つこと

少子化と共に、家庭の中で大人が子どもに合わせて生活をする「子ども中心のくらし」になってきています。また遊びの中では、自分の思いをすぐに通そうとし、思いどおりにならないと調整ができずに泣く子や、手や足がすぐに出ていざこざになってしまう子ども低年齢では少なからずいるように思います。私は、親が子どもを大切に思うことも、遊びの中で子どもが自分の思いを大事にして発揮して実現していこうとすることも、とても大事ななことと思っています。しかし一方で、世の中では相手に応じることやそのために待つことが大事だということも、幼児期の園生活で少しずつ肌で感じていくことが必要です。

発達心理学では、このことは「自己主張」と「自己統制」という用語で説明されます。

しかし、「自己」を中心に、主張と統制という二項対立的概念で考えるよりも、かかわり合うものと共に暮らすとはどのようなことなのかという折り合いのダイナミズムや共生の感覚を培っていくことがとても大事です。なぜならその中で、かかわるものへの愛着や、いとおしみが生まれていくからです。たんに自己を抑制するというのではなく、かかわることによって思いどおりにならないからこそ学び、工夫し、喜び合うという、時間をかけた経験の流れを、家庭では得にくくなっているからこそ、大事にしたいと思います。自然、特に栽培や飼育という命あるもののかかわりや天候などの自然現象は、このことを子どもたちに無言のうちに教えてくれます。

いわき市立藤原幼稚園では、四歳のK君の「イチゴも種をまくと育つの？」という声を先生が聴き取ることから、みんなでの挑戦が始まりました。土の上にそのまま置いてみたら腐ってしまったり、イチゴの種をまいたはずが、芽が出てきて喜んだのもつかの間、大きな葉っぱが出てきて雑草であったことに気づいてがっかりしたりします。また、イチゴが種からも育てられることを学んだ子どもたちは、次には母の日のためにブチメロンの種をまいてみました。でも全然芽が出てきません。それでも再度挑戦してみると今度は発芽します。そこから、温度が影響することに子どもたちは気づいていきます。これら一つひとつの経験とそれからの学びや知識だけではなく、この経験のつながりの中で自然に対する興味や驚きの念、命の力強さや不思議さを感じる降り積もり経験を大事にしたいと思います。それが子どもという命ある存在と自然との間の共生や畏敬の感覚を培うと思うので



す。環境教育というような大きな言葉や活動ではなく、この日々の感覚の浸透が無意識の層で生き方を支えていくのではないのでしょうか。

冬の寒い日、相模原市あゆの子保育園の五歳のRちゃんは園庭の容器の中に氷が張っていることに気づきます。それを先生や友達に伝えるところから、クラスみんなでの氷作りが始まります。わくわくしながら朝、園庭の容器に走っていく子どもたち。次には砂糖や塩を入れたり、いろいろな容器を使ったりしてみます。毎朝一番に園庭に走っていく子どもたち。でも氷はできていません。気温5℃でした。何日目だったでしょうか。雨交じりの気温1℃の日に氷ができていました。子どもたちは水に関心をもって、寒さを忘れて園庭にいます。そうなると5℃や7℃の日にはT君は「今日は暑いなあ。暑い日だ」などと言ったりしています。それは相対的な温度感覚です。四季のある日本だからこそ、さまざまな局面で自然に合わせることや待つことの経験によって、子どもたちの心も共に醗酵し熟していくのを感じます。このような感覚を共に感じ生きていく保育者に、私はいつもみずみずしさを失っていない魅力を感じるのです。

2 自然の中でのくらしの智恵

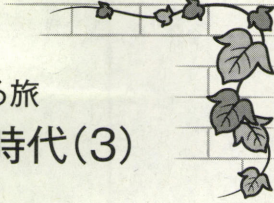

自然というと科学的な活動が話されることが多いのですが、私は自然と共につき合って培われてきた日本の衣食住のさまざまな智恵の共有経験がなされることこそが、自然を科学的にかかわる対象として分けるのではなく、自然に囲まれ一体化して生きていくという

幼児のくらしを豊かにしてくれると思っています。よもぎ団子作りや野菜作り、米作りなど、自分たちで苦労しそれなりの時間をかけて集めたり、育てて収穫したりしたものを食べる経験によって、初めて「いただきます」という、ほかの命や育てた人への感謝の意をもつ言葉が発せられ、共に仲間と味わって食べる食卓の経験につながります。色水から始まって、草木の汁で布を染め、弦や糸を編み、木の実で飾りを作るなどの経験が、衣を自分の工夫で装う経験へとつながります。また住まう場を花々や葉で彩ることを子どもたちが心地よいと感じられることが、くらしを美しく飾ることの心地よさという、住まいのたずまいのあり方への感覚を培うことにつながります。

自然が戸外での経験だとすれば、それを取り込みながら、室内でそれを使って味わうくらしが送れることが大事でしょう。また反対に、絵本を読んでから戸外へ、巣箱や風車、こいのぼりなど、室内で作ったものが外へとつながることも大切です。外と内との流れが風通しよくつながることによって、子どもの感性が四季の変化と共に磨かれ、そこでのつき合い方の智慧を子どもなりに感じ取っていくことができるのではないのでしょうか。

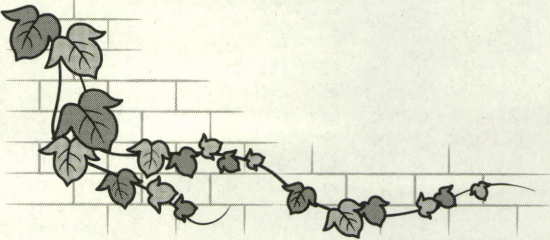
幼児が自然とかかわることを、理科や科学の基礎を学ぶ経験として位置づけられるととらえるのみではなく、日本の風土の中で自然に活かされて培ってきた智慧のあるくらしを受け継ぐ生活者として育つための経験としてとらえていきたいという願いを込めて、自然をめぐる経験を保証していただきたいと思います。

(東京大学大学院教授)



幼稚園の源流を求める旅
森有礼の第二次在米時代(3)

森有礼の第二次在米時代と アメリカの幼稚園



国吉 栄

森有礼駐米時代の幼稚園

森有礼が日本初の駐劄^{ちゆうさく}外交官として在米したのは、まだ草創期にあったアメリカの幼稚園が全米への展開に向けて大きく胎動を始めた、アメリカ幼稚園史にとって特別な時代であった。

当初はドイツ人入植地の中に開かれたドイツ人の子どものためのドイツ語の幼稚園が主流であったが、英語を話す人々の間にも認知され始めていた。

政府刊行物も盛んに幼稚園を紹介していた。一八七〇年の内務省教育局年報にはエリザベス・ピーボディーの Kindergarten Culture が、翌年の年報には、教育局長イートンの助手ジョン・クラウスとピーボディーの二編の幼稚園紹介文が収録された。ピーボディーがワシントンに招かれて働いた成果は冊子 The Kindergarten として実を結び、一八七二年七月に教育局から出版されて、各方面に大量に配布された。一八七三年の年報には全米の幼稚園を網羅した最初の統計が発表された。

公立幼稚園設立の動きも起きていた。ピーボディーの精力的な働きかけによって、セントルイスの教育長ウィリアム・ハリスが、同市の教育委員会に幼稚園を学校教育の一部に導入するよう勧告していた。ポストンでは実験的に公立小学校に幼稚園が付設された。

日本の幼稚園史研究にとって注目すべきは、こうした動きが、日本とは関係のない海の向こうの外的状況としかあつたのではない、ということである。森はしばしば教育局にイートンを訪ねて、親しく情報交換した。教育局年報には、森からの提供と明記して日本の教育資料が掲載された。森もイートンから教育局の各種出版物を受け取った。従来の日本幼稚園史研究では報告されていないが、前述の、ピーボディーの *Kindergarten Culture* が掲載された一八七〇年の年報と、ピーボディー監修の *The Kindergarten* は、わが国の国立公文書館に所蔵されている。前者には文部省宛の森のサインがある。ごく早い時期にわが国に入った幼稚園文献である。

しかも森は、文献を通してのみ幼稚園についての知識

を得ていたのではない。日ごろ教育に対する強い関心を表明していた森に、イートンが、彼の依頼により教育局で仕事中のピーボディーを紹介しなかつたとは考えられないからである。なにしろ彼女は教育局が広報に力を入れている幼稚園運動の中心人物であり、「マサチューセッツ州議事堂の正面にダニエル・ウエプスターと並んで像が建てられているほどの著名な教育者」ホーレス・マンの義姉なのである。イートンは森が紹介した一介の学生に同道して上院議員に会いに行つてくれたり、マン夫人への紹介状を書いてくれたりする人物でもある。森は駐米時代に三つの重要な著作を発表するが、そのどれにもホーレス・マンを高く評価する言葉や、マンの著作からの引用がある。それらもこうした具体的な人的交流と無関係ではあるまい。

ポストン滞在中のある日、私はピーボディーが晩年を過ごしたコンコードを訪ねた。美しいスリーピー・ローの丘に彼女の墓があり、エマーソンやオルコットなど彼女の親しい友人たちもそばに眠る。墓苑近くにある

公共図書館は、その昔はエマーソンやピーボディーらが寄贈した書籍が蔵書の中核であったという。その特別資料室で思いがけずいただいた論文の抜き刷りに、私は大変驚かされた。ピーボディーがWest Streetの本屋で取り扱った外国書籍の輸入業務を託されていたのが、彼女のいつつGeorge Palmer Putnamだということである。

私は以前、その息子が亡き父をしのんで著したGeorge Palmer Putnam 1814-1872という本を読んだことがあった。著者は、書籍の取次会社を経営していた父親と森有礼との交友を懐かしそうに記していた。森が自身の重要な著作*Religious Freedom in Japan*（日本における信教の自由）を発表前に父に見せにきたことも記されていた。父が突然の事故で亡くなった際に届いた森の手紙も収められていた。その人がピーボディーのいとこだったとは。

帰国後、私はすぐにその本を読み直した。何と軽率なことであろう。私は同書の日本に関する部分を拾い読みしていたに過ぎず、同書にはエリザベス・ピーボディーの思い出も書かれていたのである。

日本幼稚園史研究の課題

日本の幼稚園はどこから来たのか、という問いに答えるために考えなければならぬことは何か。

幼稚園の導入に関する研究は決して少なくないが、研究者の関心はウィーン万博を代表とする海外博覧会における情報収集と岩倉使節団の体験とにほぼ絞られ、幼稚園運動の当事者である人々と同時代の空気を吸い、彼らと親しく交流していた人間の存在を、ほとんど見過ごしてきてしまったのである。

幼稚園史は注目してこなかったが、森と幼稚園との関係については、実は早い時期に言及されていた。彼は明治二十二年、大日本帝国憲法発布の日の朝、暴漢に襲われ命を落としたが、それから十年後に出版された木村匡『森先生伝』（大空社）には次のように記されている。

先生甚学を好む（略）其本領とする所の教育に関して是最精神を傾注し、苟くも閑あればコネクチカット州、マサチューセッツ州の学校を巡視し、或は学者に

就き、其説を叩くを常とせり。幼稚園のことの如きは、当時の米国に於てすら未だ人心を感ぜしめざるに、先生率先して之を研究せり（同書 62〜63頁）。

木村は森が文部大臣であった時の秘書官である。同書は国体主義者という森の虚像が形成される遠因となった悪書とも評されているが、直接森から聞いたものであろうか、事実関係の記述については、その多くがのちの研究によって裏付けられている。

私は幼稚園史に興味を抱く者として、この記述に非常な関心を寄せざるを得なかった。「幼稚園のことの如きは、当時の米国に於てすら未だ人心を感ぜしめざるに」など、事情を知らなくてはとも書けるものではない。しかし教育史研究においても、木村が明確に記した森と幼稚園とのかわりについては、直接的な関心が向けられることはなかったのである。

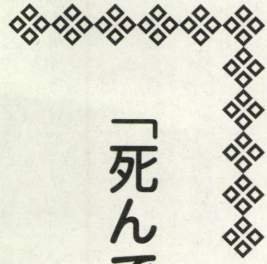
森有礼研究に新たな地平を開かれた林竹二氏は、かつて、今後の森有礼研究は、「二度目のアメリカでの彼の経験したもの、彼の編著の立ち入った吟味が必要であ

る」（『林竹二著作集2』197頁）と述べられた。その後多くの研究が発表されたが、「二度目のアメリカ」、すなわち外交官として赴任した彼の第二次在米時代そのものを取り上げ、新たな資料を発掘し、そこから彼の経験を明らかにしようと試みた研究はわずかであった。

森の活動分野は政治・外交・文化・教育全般と広範にわたるため、研究者の関心が幼稚園というマイナーな分野に向けられなかったのはやむを得ないかもしれない。しかし、森の第二次在米時代は日本幼稚園史にとつては決定的な時代である。木村のあの記述を本場に証明する仕事はまだ残されているのであり、それは幼稚園史研究者こそ担うべき仕事ではないか。そうすることによって、新たな幼稚園史を書き起こすことができるのではないか、森有礼研究にも資することができるのではないか、と思うのである。

日本幼稚園史研究には、在米時代の森有礼の経験を明らかにするという重要な課題が残されている。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）



「死んでいい」の遊びをめぐって

清水 哲

皆さんは、「死」という言葉からどのようなことを連想されるでしょうか。永遠の別れ、魂と肉体、天国と地獄、成仏、生まれ変わりなど、人によって、また国や宗教によってさまざまだと思います。これから紹介するのは、一人の子どもと大人が「死」をめぐって真すぐに向き合った、養護学校でのある遊びの話です。

六年生のN君が、四月のある日に突然始めたのが「死んでいい」の遊びでした。登校したN君は、かば

んをロッカーにしまう間もなくクラスルームのドアを閉め、電気を消し、カーテンもすき間なく閉めて、私と二人だけの完全な密室状態になりました。部屋の中は真っ暗です。それから彼はウルトラマンになり、私に向かってビームを放つまねをします。「よし、ウルトラマンごっこだな！」と思った私は怪物になって応戦しようと思いますが、「だめだ！ 死んでいい！」とN君。それでも立ち上がってウルトラマンごっこや相撲にもっていかうとしても頑として受け入れず「ダ

メダ！ 死んで！」と必死に訴え、至近距離で何度もビームを放つたり「バンバン！」とピストルで撃つまねをしています。それでもなお立ち上がろうとするしつこい私のことを、最後は力づくでなぎ倒そうとします。N君の絶対に譲らないという意志の強さに、私は抵抗することをあきらめ、覚悟を決めておとなしく「死ぬ」ことにしました。

私がここまでN君の「死んでいい」の要求に抵抗したのは訳があります。一つは、N君の成長に伴う理由です。三年生の時に愛育養護学校に転入してきたN君。担任のことを頼りにしながら少しずつ安心して学校で過ごせるようになり、人間関係にもだいぶ広がりが出てきていました。そんな時期に、特定の大人と二人きりの閉じられた空間でほかの人が入ってこられないような遊びをすると、せっかく外に対して開き始めたN君の扉が再び閉じてしまうように思えたのです。もう一つは、私自身が八年前に父親を亡くしているこ

とにあります。それから死に対するイメージが「いなくなってしまう」「もう会えなくなってしまう」などネガティブなものになってしまったため、たとえ子どもとの間のごっこ遊びだとしても、「死」に関係することはできるだけ避けたかったです。

クラスルームの畳の上にあおむけに倒れている私が「死んだ」ことを確認すると、さっきまでの必死な表情は和らぎ、N君は早速、遊びの準備に取り掛かり始めました。タンバリンや鈴などの楽器や楽譜などの本をどっさりと抱えて持ってきては私の周りに置き、キーボードを用意して「トズン、ズン、チャ、ズン、ズン、チャ……」という軽快なドラム音をかけます。今度はタオルケットを持ってきて私の上に掛け、顔には白いタオルをそつと載せました。すると、タンバリンでわざと大きな音を出して「どうだ？」とニヤッとしながらこちらを振り返ります。ガバッと起き、「う

るさくて死んでいられないでしょ！ お静かに！」と私が言うのとケラケラ笑い、「バン！」と撃つてまた私を「死なせ」ます。軽快なリズムが流れる中、このようなやりとりが何度も繰り返されました。「本当は死んでないんでしょう？」そんなことを確認しているようでした。

しばらくしてN君はCDの入ったかごや教材棚の引き出しなど、いろいろなものを持ってきては私の胸やおなかのあたりにせつせと載せていきます。「お供え物でこんもりと盛り上がっていて、まるで自分自身がお墓のようだな……」と心の中で苦笑いしていると、さっきまでのN君の楽しい雰囲気は一変し、「しみずの、ばか！」「もう遊ばない！」「あっち行け！」などと、急に怒り始めたのです。「何で死んじゃったんだよ！」という憤りを訴えているように感じました。すると今度は、「悲しいよ〜」と涙目になりながら私の顔の前で悲しみを訴え始めました。しばらく悲しみに

暮れていたN君でしたが、だんだんと穏やかな表情に戻り「しみず、ありがとう！」とすつきりとした表情で言い残し、立ち上がったのです。

それからまた怒り、悲しみ、感謝をし……これは何度か繰り返しました。途中、その時々自分の気持ちをノートに書きなぐって「死んでいる」私にそれを読ませたり、そのノートを私のおなかの上に載せたりして、再び自分の世界に入り込んでいきました。また、キーボードのリズムだけではなくミニコンポの前に座り、その時々自分の気持ちや状況に合わせて選曲した曲をかけながら、この遊びを続けました。二時間ほど続けていましたが、すでに十二時を過ぎていたので「そろそろお昼ごはんを食べに行かない？」と、そつと目を覚まして声をかけてみると、N君は「いいよ」とすつきりとした表情で答え、すぐに部屋の電気をつけて片づけをし、何事もなかったかのように昼食へと向かいました。

後で振り返ってみると、そこでN君が表現していたのは、大切な人の死に直面した時に、人がその死を受け入れていく過程そのものだったように思えました。

テレビなどでこういう場面を目にしたのかもしれないが、表情はとても真剣だし、たんなるテレビドラマの再現とも思えませんでした。N君がなぜこの遊びを始めたのか。どうしてやろうと思ったのか。その時のN君の気持ちを察することはできませんでしたが、「死んでいる」時に私はいろいろなことを考え、思いをめぐらせていました。「死ぬってこういうことなのかもな」「もしかしたら、本当に自分はもうすぐ死ぬのではないか」本気でそのようなことを考えました。「でも、もし本当に死んだとしても、自分の死をこれだけ悼み、心から『ありがとう』と言ってくれる人がいたらきつと幸せなんだろうな」そんなふうにも思いました。こんなに思ってくれる人がいる自分は幸せ者だなあと、しみじみと感じながら「死んで」いました。

「N君、こちらこそありがとう！」そんな気持ちでいっぱいでした。

後日、この話をほかの職員と振り返る機会がありました。その職員は「N君はその遊びを、いま、あなたとやることに意味があったのではないか」そして、「怒り、悲しみ、受け入れ、感謝しているのは、ほかでもないN君自身だったのではないか」そのような感触を聞かせてくれました。私たちの学校に転入してきたのはN君本人がこの学校のことを気に入ったからですが、おそらく前の学校にも好きな友達や先生がいたはずです。また、転入してすぐに出会い、N君が大好きになったある職員は、その後、体調を崩し長期的に休まざるを得ない状況になってしまいました。このようにN君は、自分にとって大切な人の喪失体験を何度かしてきました。しかも、それらは自分の気持ちとは関係なく、相手の都合や外的な要因で離れ離れにさせられてしまうものでした。そんな中、安心して自分を

表現できる相手として関係を築き始めた私と、この遊びをすることはN君にとって必然的なことだったのだと思います。大切な人との別れ（＝死）をN君自身が主体的に行うことで、これまで受身的に自分のもとに降り掛かってきた悲しい体験を能動的にとらえ直し、いま、目の前にある大切な関係を再確認しようとしていたのかもしれませんが。「死んでいい」の遊びはこの後もしばらく続きましたが、この遊びを徹底的にすることで何かを得、そこで得たものがいつか必ず実を結びN君の力につながるはずだと思い、納得するまでN君がこの遊びをやりきることができるよう、気持ちよく「死んで」いることにしました。

二学期に入ってからも時どきこの遊びを誘ってくることはありましたが、緊張感はほとんどなくなりました。「おねがーい、死んでー」とものすごく甘えた感じで頼んでくるので、頼まれた私のほうの調子が狂っ

てしまいます。最近ではビームやピストルで私を「撃ち殺す」ことはほとんどなくなり、テレビアニメ「名探偵コナン」の主人公である江戸川コナン君になりきり、『腕時計型麻醉銃』を撃つまねをして「眠らせる」ようになりました。ぬらしたタオルをギュツと絞り、「眠っている」私の腕やおなかをそつと拭き、優しく介抱してくれたりもします。麻醉が切れたからと言って私が起き上がると、もう一度眠らせようとするN君と取っ組み合いになることもあります。いままではそれ自体が楽しい遊びになっています。

子どもは、大人の都合や社会的常識などにより、受動的な体験を余儀なくさせられてしまうことも少なくありません。しかし、子どもも大人と同様に、自分の人生を生きていく尊い存在であることに変わりはありません。子どもにとって遊びとは、受動的な体験を能動的にとらえ直し、納得して次へ進んでいくための大事な舞台という意味合いもあるのかもしれませんが。子

どもが「やりたい！」と強く願う遊びは、大人にとって（おそらく子ども本人にとっても）その時には意味がよくわからなくても、絶対に必要なことなのだと思えます。

二人で外に出かけた十月のある日のこと。ちょっとふざけていたN君が、私のかばんを階段の途中から下に落としてしまいました。「何でそういうことするの！」と私が怒ると、N君も「しみず、もう、あつち行け！ 出て行け！」と怒りをあらわにし、一定の距



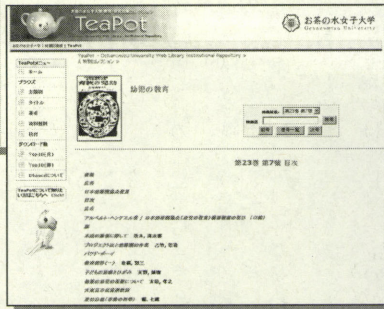
離をとって歩き始めました。駅のホームで電車を待っている時にも私とは別のドア位置で待ち、電車の中でも離れて立っていました。互いにひと言も発せず、一度も目を合わせません。三十分以上もそのような状態が続き、結局私のほうから「さつきは強く言い過ぎちゃったね。ごめんね」と謝りました。するとN君も「うん……いいよ」と納得して仲直り。N君をおんぶし、学校までの登り坂をゆっくりと歩んでいきました。「そういえば、N君とけんかをしたの、初めてだ！」そのことに後で気づき、誰かとけんかができるまでにN君がたくましくなったこと、そしてN君自身がそれだけの関係性を育む歩みをしてきたことに、大きな喜びを感じました。これから先も、N君にとって大切だと思える相手に出会い、自分の正直な気持ちを伝えることのできる関係性がさらに育まれていくことを願っています。

（愛育養護学校小学部）

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (17)

『幼児の教育』ネット散策の雑感

阿部真美子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション（略称 TeaPot）」にてバックナン
バーインターネット公開中。
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼はじめに

文明の利器は使いこなすのが厄介だと、ブツブツと文句が口をついて出る日ごろの私である。しかし、情報入手のためのインターネット化が進行する時代にあつて、うまく使いこなせないなどと口にするのは、恥ずかしいという思いがある。そのような熟年世代の同類はいらっしゃらないのだろうか。インターネットの扱いに心もとない私が、この数か月間のインターネットにおける検索、というより散策で得た新鮮な出合いの幾つかを記すことにしたい。

▼検索プラス散策は楽しい

まず私が試みたのは、自分の研究とかわるさまざまなキーワードを打ち込んでみることにした。しかし、なかなかヒットしてくれない。この原稿を書くということからすると、特段の成果もなくひと

月、ふた月と時間が過ぎてしまった。このシリーズ『幼児の教育』ネット公開に寄せて）を読むと、執筆者の方々はうまく資料検索の実をあげておられるので、今後の研究にとって参考大であるが、身の縮む思いであった。

思い返してみると、成果の上がない理由はキーワードがうまくヒットしなかっただけではない。隘路脱却のため、自分の研究につながるキーワードから離れてみようと思い、第一巻（『婦人と子ども』）から読み進めることにした。興味に任せてピックアップし印刷し、次々と読む。資料はおもしろく、つい引き込まれ、おもしろがっているうちに、時間は過ぎていった。古い文体であっても、『幼児の教育』は読みやすく親しみやすく書かれていることも引き込まれた理由であろう。

たくさん知らないことにも出会えた。このことも新鮮な経験であった。研究目的という縛りから自

分を自由にして、『幼児の教育』の散策は楽しかった。検索プラス探索は今後もぜひ続けてみたい。そのような豊かな時間がもてたのも、身近で手軽に見ることができるところで、膨大な資料をインターネット化していただいたお陰である。ご苦労された方々に感謝したい。文明の利器は使いようである。

▼臨場感あふれる言葉に触れて

臨場感にあふれる言葉による記事が多いというのも、『幼児の教育』散策での感動であった。倉橋惣三は代表選手だと思う。「保育そのときどき」というタイトルの記事（第三十二巻第十号P.71）を見てみよう。倉橋は東京女子師範学校附属幼稚園の保母室のグリーンボードに次のような言葉を書いた。

秋晴る、日よ

子どもらの聲高し

外へ、外へ、外へ

秋の高く青い空の下で子どもたちの遊びに興じる躍動感がイメージされる。保育者たちには瞬時に倉橋の求める保育が伝わったに違いない。そのエピソードに続いて、幼稚園の子どもが身近な外である園庭に出ない（あるいは保育者が積極的に出そうとしない）こと、そして「柿、栗、等々、お話の中だけでよく知ってゐて、ほんもの、木を見たことのない子ども」という都会の子どもの状況を内心憂慮しつつ、保育者を批判したり叱責したりするのではなく、「見せてやりたいですね。」と呼びかける。さらに、「どこでも彼しこでも、みんな幼稚園だけに言つて見たい。あなたの町も村も、野も丘も海邊も、一とくるみに、われ等の幼稚園と見なませう。」という言葉が続いて、倉橋の中の大きな「園外保育」構想論が展開されるが、あくまで言葉は読者への呼びかけである。

もし私が当時の保育者であつたとすれば、と想像

してみよう。保育界の巨人ではなく、身近にあつて保育者の仕事の大変さをよく理解し、優しく教諭してくれる保育の親の言葉として、体全体に浸透していくかもしれない。『幼児の教育』における倉橋惣三にかかわる記事は、倉橋研究、日本の保育史研究にとつて大変価値のある資料であることはいふまでもない。だが、それだけに限定されないであろう。現代の保育実践や保育者養成を考える上でも示唆に富むものというのが、わが実感である。論理から入るだけでは、気づきには到達しにくいことがある。「解題」（津守真）では『幼児の教育』誌上における倉橋の保育論について、「具体的な保育の根底にある子どもの見方が、詩的な表現をもつて、一貫してあらわれている。」と述べている（『復刻幼児の教育 別巻』一九七九年三月p. 9）。疲れた時など倉橋の詩的表現に癒やされるひと時もあつてよい気がしている。

▼外国の保育と倉橋惣三

ここあたりで『幼児の教育』と私の研究との接点をもつことにしたい。日本の保育指導者はどのようにアメリカ合衆国の思想や実践を接取したのだろうか。倉橋は「誘導保育論」を作り上げる上で、積極的にアメリカ合衆国の新教育を吸収したことはよく知られている。『幼児の教育』を見る限りでは、彼は新教育の中心であったシカゴのシカゴ大学とニューヨークのコロンビア大学を拠点にして、実践見学、雑誌類、書物、インタビュによって当時の情報を入手していた。「シカゴ大学の幼稚園へも一週間程入り浸って、先生方とも、目の碧い、髪の紅い、人形の様な子供達とも懇意になりました。」(「シカゴより」『幼児の教育』第二十卷第五号 p. 169) というように、子どもたちのかかわりも楽しんだようである。この時、幼稚園と小学校との連

続プログラムと取り組むテンブル女史の論文を入手し、『幼児の教育』編集部へも訳して掲載するように依頼している(同上 p. 170)。上記の二つのカレッジはわが国でも著名であるが、次のカレッジはほとんど知られていない。

シカゴに居た時でした。有名なミス・ハリスが校長をして居られるナショナル・キンダーガーテン・エンド・エレメンタリー・カレッジを訪ねました。その日の私の目的は保姆科の方の参観でした。そして、どこを参観しても何時も感じる様に、自分達が國でして居ることに、まだ足りないところの、いくらもあるのを思ったりしました。此の學校には生徒の實習の爲め幼稚科も勿論ありました。私はそれも見せて貰いました(「森の幼稚園」『幼児の教育』第二十一卷第二号 p. 49)。

このカレッジは、小さな学習会から始まって、その当時には母親教育のコース、慈善幼稚園のコース、小学校コースなどをもつ教育専門のカレッジとして成長し、拡張講座（エクステンション）も展開する先進的なカレッジでもあった。そのアーカイブに何度も資料調査に通った私としては、この記事にはとても親近感をもったものである（このカレッジは、現在ナショナル・ルイス大学となっている）。

さて、このカレッジの教員から紹介されて、倉橋は「此の國で一番すきな幼稚園」（同前p.50）と出会う。シカゴから列車で一時間の郊外にある小さな田舎町、ドナー・グロープの幼稚園（彼は「森の幼稚園」と呼ぶ）である。その幼稚園のさまざまな環境について述べる一方で、「人間味のある幼稚園」（同p.52）とも評価し、「幼稚園は人ですね。つまり先生の人柄ですね。」（同p.60）と結ぶ。白人中心主義で、黄色人種である日本人への差別が強

かったであろうアメリカ社会での、彼の負の経験を想像できるように思う。

アメリカ合衆国での倉橋の情報収集は以上に尽きるものではない。今後も彼の歩いた道をたどるといふ検索の楽しみが増えた。

▼学生の教材として活用する

最後に、教師である私にとつての『幼児の教育』について述べてみたい。最近の学生にレポートを出すときと当たり前のように、インターネット検索した材料で書いてくるといふのは、大学教員間の会話でよく聞かれる話である。中にはウィキペディア（Wikipedia）を資料に使ったりしているという嘆きの声もある。このようにインターネットは若い世代にとつて情報収集のツールになっているので、それならば『幼児の教育』のネット検索を有効に活用できないかと思う。

たとえば、「保育実践と子どもの遊び」をテーマにするとしよう。学生に『幼児の教育』を検索し授業の材料を提供してもらおう。検索のプロセス、そのテーマにヒットした主立った資料の一覧、なぜその材料を選んだか、記事を読んで考えたことなどを発表してもらい、さらに選んだ材料について意見を述べてもらって、全体で討議をする。図書館に行きたがらない、本を読まないと嘆いても仕方ないので、このように「調べる」「まとめる」「プレゼンテーションする」「ほかの人の意見を聞く」「意見交換する」ことをつなげてみたい。この先にさらに図書館に足を運ぶようになることを期待するのは甘いかもしれないが、若い世代に本物の情報との出会いをつくり、多くの気づきをもってもらうことへのイニシエーション（入門・手ほどき）にはなるのではないか。きつと若い世代は私が想定しないような新鮮な成果を示してくれるように思う。

『幼児の教育』は実践について考える格好の材料が詰まっている。インターネット化する以前から三数十年間、保育者養成にかかわる授業の教材に使ってきたのだが、その場合は私自身が選び学生に与えてきた。イニシエーションとしては、これではいまの学生にはマッチしていないという反省があった。では同じ教材を、若い感性を揺さぶり、考えを引き出す材料にできれば、という考えに達した。このことに共感してくださる方がいれば、情報交換なり共同研究していききたいものであるが、いかがであろうか。

本シリーズの二回目で瀧川光治氏が、「幼児教育学・保育学の先達の論考や実践がインターネット上で検索でき、PDFファイルで見られるということ」は、保育者養成教育の教材としての積極的活用という道も広がるのではないか（第一〇八巻第二号）と述べておられる意見に同感であることを付記する。

（青山学院女子短期大学子ども学科教授）

保育の現場から

A夫の葛藤と変化

「恐竜にかかわる遊び」を手掛かりに考える

上坂元絵里



お山でノビル探し

「友達と一緒に楽しさ」

年中組の三学期、二月半ばの日差しが暖かな日、A夫とB子が「先生！ お山にノビルがあつた！」と園庭からうれしそうに保育室に戻ってきた。A夫が差し出した握りこぶしに目を向けると、小指の先にも満たないような小さな実がついていた。

子どもたちが「お山」と呼んでいるのは、園庭の一段

小高い場所で、西側には築山があり、東寄りにイチヨウの大木がそびえていて、子どもたちが落ち着いて過ごす空間になっている。お山でノビルが採れたことは、いままであまりなかった。

「進級当初、五月ごろには、暗い表情をしていたA夫が……」と思いながらA夫たちと共にお山に行ってみる。「ほら」と指さした先には、確かにノビルの葉が伸びていた。「何があるの？」と数人が寄ってきて、「私も欲しい」と探し始めた。お山の土は踏み固めら

れていて、砂場用のシャベルで掘ろうとしても子ども
の力では歯が立たない。そこで、大人用の移植こてを
使うことを勧めてみた。

A夫は、翌日も朝からB子とお山へ出かけた。しば
らくして、「今日もノビルを掘っているのかしら？」
とお山へ行ってみると、A夫が一人でしゃがんでいる。
片手でノビルの葉をつかんだまま、保育者に目を向け、
「B子ちゃんが先生のことに呼びに行ったから戻って！」
と必死な表情で言う。「私に用事があったのなら、
ちようどよいタイミングだったはずなのに？」と思い
つつ、仕方なくもう一度下りていく。その時のA夫に
とっては、B子が保育者を呼びに行ったのに入れ違い
になり、B子が困っているはずだということのほうが大
問題だったのだ。無事にB子と出合い、「昨日のシャ
ベルが使いたい」と言うので、移植こてを手渡した。
ノビルを無事に掘り起こすためには、一人が葉を持
ち、もう一人は根っこが切れないように注意深く掘る
必要がある。それを数人が丸く向き合って見守る。そ

れだけの作業でも、それぞれが役割をとり、力を合わ
せてやる心地よさを味わっているようだった。低い姿
勢で、顔を寄せ、息を合わせる体の動きが、子どもた
ちの間につながっている感覚をもたらす。A夫とB子
は、それまで一緒に遊ぶことはあまりなかったが、一
緒にノビル採りを始めた「仲間」としてA夫はB子を
受け入れ、大切に思っていることが伝わってきた。そ
の後も、数人の子どもがノビル採りを夢中になって続
けていた。大人の場合でも、一度目を向けると、
「あっ、ここにも生えていた」と、気にかけていない
時には見えてこなかった物が目に飛び込んでくるおも
しろさを経験することがある。子どもたちも、よく似
た草との違いを的確に見分け、年長組に進級後も楽し
むことが続いた。

このように友達と一緒に、穏やかに自然とのふれあ
いを楽しむ姿をほほ笑ましく感じながら、年中組の年
度初め、五月ごろのA夫の戸惑いや、葛藤に向き合っ
てきたこれまでの経緯が思い起こされた。

恐竜にかかわる遊び

「今までどおりに友達とかかわれない葛藤」

A夫は、三年保育で入園し、年中組に進級した。担任が替わり、クラスの仲間が増えるという環境の変化のもと、年少組でも同じ組だったC子、D夫と三人で遊んでいた。大好きな恐竜になりきって、廊下や園庭を飛びはねながら走り回る。二本足で歩く恐竜の動きが真に迫り、三人で世界を共有して遊んでいる様子だった。体を動かし、園庭の広い空間を使って伸び伸びと遊んでいて、出会ったばかりの担任が、簡単には入り込めないきずができていると感じた。

五月下旬、年長児が恐竜を立体的に作り、遊戯室の舞台で動かして「恐竜ショー」を始めた。A夫も自分で紙に恐竜を描き、年長組の担任や年長児に手伝ってもらって貼って付けた。このショーに参加させてもらっていた。ほかの年中児は、観客になってショーを見ていた。「C子やD夫とは別に一人でやっ

ている」と思いながら見ていたが、そのころからA夫の友達とのかかわりが変わっていった。

C子やD夫は、年中組から入園した新しい友達とも遊ぶようになったが、A夫はそこにうまく入れない。

A夫なりの精いっぱいのアピールで、D夫たちが遊んでいるすぐそばに中型積み木で囲むような場を作ってみるが、D夫たちと一緒に遊ぶことはできず、結局一人で遊んでいた。喜々とした表情で恐竜になっていた進級当初と違い、所在なげに過ごすことが多くなった。「寂しそう」と心配になる一方で、別の友達がA夫の作った場に「入れて!」と近づいてくると「入るな!」「ここはAの場所」と強い口調で拒絶する様子も気になった。口調がきついでなく、目をつり上げて険しい表情でにらむ。こうしたA夫の口調や表情が原因でのトラブルが起きることも少なくなかった。保育者が「A君もやる?」と誘う声をかけても「Aはいい!」と、とりつく島もない反応が返ってくる。A夫が「年少組の時は楽しかった。でもこのころ、お友

達と前みたい楽しく遊べない」と悶々としていることは痛切に感じながら、どう支えていけばいいのか見えてこない日々が続いた。

♪ 友達とのかかわりを求めて♪

六月初め、A夫が廊下の壁に何かを貼り付けていた。手のひらより少し大きいくらいの紙に描いた恐竜（頭には王様の冠をかぶっている）だった。切り取った恐竜の裏側にセロハンテープを輪にして付けている。ていねいな動作にA夫のきちようめんさが表れていた。

A夫の背中が寂しそうで、その心もちが推察された。保育者としては「何かA夫がやり始めたことが、友達とのかかわりにつながれば……」という思いで、「大きな紙を貼って、恐竜の国にしてみる？」と声をかけた。A夫が選んだ紙は、くちば色という地味な色だったが、壁に紙を貼っただけで、恐竜の絵が前よりもぐっと引き立った。恐竜の周りの境界が明確になり、何かをやるうとしていることが、周りに伝わりや



▲恐竜の国づくり

すくなつた。「保育者も一緒に描いていると、誰か興味をもつてくるかしら？」と思案していると、D夫が「何やつてるの？」と近づいてきた。「恐竜の国にするんですつて」と保育者が話すと、「Dもやりたい！」と小走りに自分のクレヨンを取りに行き、描き始めた。もともと一緒に遊ぶことの多かつたD夫のほうから入ってきてくれたことは、うれしいことだったに違いない。保育者も「ちようどよかつた」とうれしく思った。さらにE子やF子も加わり、A夫の表情は先ほどとは見違えるようになった。

数日後、A夫は恐竜と一緒に作ったE子と「あつあつキッチン」という小さな看板を作つて「やきそば作り」を始め、E子と一緒に遊ぶことも多くなつていった。D夫との関係が復活することにつながるのかと思つたが、新しい友達とのかかわりを求めていたことも理解できた。「あつあつキッチン」が保育室の片隅の、こちんまりと落ち着くコーナーだったことも、A夫のいまの心もちに合っているのだと感じた。

この恐竜をめぐる出来事は、一つのきっかけになつたように思う。A夫は「友達と遊びたいが、うまくいかない」と悩みながらも、自分で行動を起こしていた。自分が始めたことに友達が気づき、関心を抱いてかわつてくれるという体験を通して、うれしさや満足感を少しずつ感じていたと考える。また、自分が好きで夢中になれるもの（A夫の場合は「恐竜」だった）を見つけられたことも重要な鍵であつた。

↓満足感を（自分の）言葉で表現する↓

時を経て、年中組の二学期も終わるころ、一学期にA夫とトラブルになることが多かつたG夫が「僕、Aちゃんと友達になつちやおうかな？」とつぶやくように言っているのが耳に入った。A夫は一瞬間つたように首をかしげて「でも、このごろ（僕）お友達いるんだよね」と応えた。A夫の口調は穏やかで「Gちゃん嫌だ」という調子はまったく感じられず、G夫も、怒つたり傷ついたりした様子はなく、「ふーん」とい

う感じて会話が終わった。寂しさと向き合い、葛藤していたA夫が「僕にはお友達がいる」と実感していることが伝わってきて、少しホッとした場面だった。

A夫の年中組での一年間を思い返すと、保育者も、保護者も共に揺れ、戸惑い、葛藤に向き合ってきた。

「嫌だー」「やりたくない！」という表現の奥にある子どもの心に思いをはせる機会がたびたびあった。

年長組になって

年長組に進級したA夫は、自分が好きな遊びのテーマをもち続け、友達と一緒に楽しむようになった。友達とのかわりも少しずつ変化しながら広がっていった。表情が穏やかになり、登園の時には、保育者の顔をしつかりとのぞき込んであいさつをする。ちよつとしたしぐさにも生活する心もちが表れるものだと、A夫のお陰で感ずることができた。

A夫の穏やかな暮らしぶりをうれしく感じていた年長組の十一月、保育者として再び考えさせられること

があった。卒園アルバムの表紙にする絵を水彩で描くという機会を設けた時、「僕はうまく描けないからやらない」という、かたくなな反応が返ってきた。保育者から見れば、伸びやかに巧みに表現できると感じていたのに、A夫の自分自身のとらえ方は違っていた。まじめで、きちょうめんだからこそ、一つひとつのことをさりげなく済ませることができず葛藤と繰り返し向き合うA夫の繊細さを、改めて感じさせられた。

A夫は、自ら行動することが何かにつながっていく、という実感を蓄えながら成長してきた。限られた紙面の中で、多くの出来事に触れてきたが、生活の中の小さなひとこまがつながり子どもが育っていくことを、A夫は教えてくれた。保育者も、一人ひとりの子どもが葛藤と向き合い、葛藤を乗り越えて育つことができる幸せを、その大変な時を振り返るいまなら、じつくりと味わうことができる。

(お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(41)〉

学内シンポジウム

「保育現場と協働して学生を育てる」を振り返って(1)

佐治由美子

二〇〇九年九月二十五日、お茶の水女子大学（以下、お茶大）幼保プロジェクトでは、同年五月の保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み^{注1}」の続編として、学内公開シンポジウム「保育現場と協働して学生を育てる」総合的保育者養成を考える」を開催しました。

今回の趣旨は、実習や観察による現場での学びによって大きく成長する学生たちを、現場と大学が協働してさらに支え育てていくことを目指して、それぞれの現場の方々と大学とで保育者養成のイメージを共有

する機会をもつということでした。

討論者としては、前回のシンポジウムで話題提供をされた保育現場の方々四名に加え、幼保プロジェクトのメンバー五名^{注2}が一つのテーブルを囲む、いわゆるラウンドテーブルの形式で話を進めていきました。

当日は、初めに幼保プロジェクト・リーダーの浜口順子がお茶大の保育者養成の特質について触れ、そこに保育の現場がどのようにかかわってきたかについているのか、大学と現場とで養成のイメージを共有しておくか、と投げかけました。それに対して、現場の方々

が、それぞれに異なる質の保育の場にあるにもかかわらず、総合的保育者養成のイメージを共に探りつつ話を展開してくださいました。また、このテーブルを大きく囲んでくださった参加者の方々からも提言への感想を出していただきました。

以下、シンポジウムの実際の様子を前半と後半に分け、今回はその前半部分をお伝えしていきます。

現場の方々から

話題提供者の所属は、次のとおりです。

- ・板野昌儀 「愛育養護学校（以下、愛育）」
- ・私市和子 「お茶大附属いずみナーサリー」
- （以下、ナーサリー）
- ・高橋陽子 「お茶大附属幼稚園」
- ・佐藤キミ男 「障がい児放課後クラブはすねっこ」

（以下、はすねっこ）

板野 学生さんが現場に入って感じ取ることはいろい

ろあると思います。私自身が実習生の立場から始めて三十年たちましたが、自分にとっては変わることよりも、むしろとどまることだったような気がしています。

愛育ではとんでもないことが日々起こるし、学生さんが戸惑うのもよくわかります。子どもと過ごす時間が積み重なっていけば戸惑いも少なくなっていくのでしょうが、その場での対応を先に頭で考えてしまうと戸惑いは無くならないのだと思う。その時にいろいろな人に助けってもらったことが後々につながっていくわけだけれど、そのような人との間の経験の無さ、そして子どもにかかわっていくことそのもの、またそれを言葉にする難しさというのがある。子どもについて語る自分が自分を語るようになっていく、それに気づくのがまた難しい。そういうことを私自身が繰り返してきたので、学生さんの話を聞いていて何ら違和感が無い。どの人も結局、現場での体験がいったいどうい

ことなのか、という問いに向かつて進んでいるような気がします。そこにいままも変わらないおもしろさを感じる。こちらの予想を超えるような発想が学生さんから出てくるなら、それはなおうれしいことだと思っています。

学生さんの変化ということ言えば、ますますかわりづらくなっているような気がする。私自身が不器用だからよくわかる。学生さんが自分の器用さを発揮できるならば、それは子どもにも喜ばれるのでいいことではあるけれど、不器用な場合には子どもに思いが伝わらなかつたりして、互いに何とか相手を理解しようということになつたりする。やりとりが成立したことを子どものほうがうれしく思ってくれて、そこで子どもとの関係が成り立つ、ということもある。そのような、関係の中にある難しさ、特にうまくいかない時に子どものそばで感じていることは、そう簡単には言葉にならない。学生さんにとってそのような体験から

得たものが、やがていろいろな人にかかわる場に出ていった時に、おそらく力となって現れていくだろうと思う。そのような意味で、保育者になってもならなくとも、保育の原点のようなものを実習の中で経験していつてくれたら、と思います。

私市 ○一歳の子どもも、声は発するが、まだ言葉としてはしゃべらない。だから私たちは、そういうところから子どもの気持ちをくみ取らなくてはいいけない。

今年度の学生さんに前期の始まりと終わりとを比べて自分自身がどう変化したと思うか、聞いてみました。ある学生さんによると、初めのころは、自分でもどうしたらいいのかわからないし、内心慌てていたことを赤ちゃんはわかっていたのではないかと思う。前期が終わるころには子どもとの信頼関係ができてきて、この子はこうしてほしいのかなと少しわかるようになってきた、ということでした。

新しく来た子で、いつもは泣いているけれどナーサーリーにいる大人に順番をつけている子がいて、一番、二番は担任。その担任の向こう側について、そこから周囲を見ている。でも、人にはすぐ興味があり、そばに来た人に対しては、あっ、あっと反応する。その子の三番目くらいになりたくて声をかけるとニコツと笑うけれど、すぐに担任の肩をギュッとつかむ。その姿を見ると、その担任と一緒にいるのが心地よいのだから、ということを感じる。

こうして三番目になることができた実習生は、子どもに何かをしたからというのではなく、その場において気持ち共有する人であったから子どもが安心できたのだらうと思う。信頼関係を急いでつくるのではなく、相手に対して待ちながら少しずつ気づいていくことが大事なのかな、と思いました。

高橋 保育者になりたてのころ、わかっているような気になっている自分がいた。その次の時期が、これで

いいのだろうか、本当に子どものことをわかっているのだろうか、その壁にぶち当たってからずっときていて……。子どものことは本当に難しい。でも、子どもの目の前にいるのだから、何かサインを出しているのであれば返してあげなければと思う。だけど、そうしている自分も、もしかしたらその子にとって迷惑なのかもしれないと思う。

ある子に追っかけ回され、近づくパンチをさされたりして、「何が何だかわからなくなっちゃいました」と素直に語る学生さんに出会った時に、よくわからないながらも子どもを感じようとしていたその姿勢をうれしく受け止めている私がついて、長い年月をかけて子どもに出会ってきている自分のほうがよわい鈍いような硬いものを身に着けてしまっているような気がする。ことがある……。こんなふうにして、新鮮な空気を時どき学生さんからももらいながら過あごしています。

佐藤 今日も小学校一年生から中学三年生まで来てい

て、年齢の幅もあり障がいもある、そんな子どもたちの集まる場となっている。子どもたちがどれほど自分を子どもだと思っているのか、それがわからない中がかかわっているような気がする。でも、こちらはどこかで子どもを大人の目線で見ているところがあると思うし、言葉遣いには気をつけながら日々かかわっている。子どもたちが自分をつげながら生きていくのか、そのところを意識に入れながら過ごしたと、いつも思っています。

子どもとのかかわりに一つの答えがあるわけではない。また、「はすねっこ」の場合は来る子もその日の日違うし、自分たちもその日の生活がどのようにつくられていくのか手探りの状態で始まっていく。学生さんは午後からなので、いくらか流れができてつあるところに加わってもらうことにはなるが、そこからの生活は子どもと一緒に手探りでつくっていったら、そんな感じに入ってもらっています。

フロアからの感想

学生 A (学部三年) 今年から公立の幼稚園にインターンシップの実習で行っています。今日は現場の先生方のお話を聞けて、すごくおもしろかったし、とても安心しました。自分は成長していないかもしれない、とか、不器用でいいんじゃないか、という言葉聞いて、よかったあ、と思いました。

学生 B (院生 M1) 私は学部の三年次から、公立の幼稚園で観察とインターンシップの両方の実習を続けてきました。子どもと、じかに触れている時と、子どもを観察している時とはまったく違う。いまは、毎日幼稚園で過ごすようになり、これまでの観察の経験が大きかったような感じがしています。

学生 C (学部四年) 観察の授業では、(かかわれないので)子どもに対して引いた気持ちになるけれど、教育実習の初日に組まれている観察は、翌日からかかわ

ることを前提としているので気持ちが違う。観察の授業でも、もっと積極的な気持ちもてたらいいかも
しれないと思います。

菊地 佐藤さんが、子どもと一緒に手探りでつくっていくという話をされた。いま学生さんが話してくれたことも、手探りなんだろうと思う。実習の初めに戸惑うというのはどの人にもいろいろにあつて、たとえば子どもに声をかけたら拒絶されたとか……自分では最初だから手探りなんだと思っていたのに、そのままずっと手探りだったりとか……。最初のところで観察的な手探り的な保育になるのは、「はずねっこ」でも愛育でも同じなのかな、と思つて聞いていました。

塩崎 最初に教えることがあるのではなく、ぱつと思いついたりしながら保育が始まっていく。子どもと一緒にドキドキしたり、ワクワクしたりするところに保育の専門性がある。小学校の実習では、一緒にワクワクするだけでなく、子どもに教えていくことが必要。

それも、子どもとの信頼関係があつた上での指導法の
のだろう。学生さん一人ひとりにどちらの実習が合っ
ているのか一緒に見ていく必要がここにある。総合的
であるということがキーワードなのかな、と思つて聞
いていました。

——次号へ続く——

(お茶の水女子大学幼保プロジェクト)

注

- 1 保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み」については、『幼児の教育』第一〇九巻第二号および第二三号を参照されたい。
- 2 幼保プロジェクトのメンバー五名とは、浜口順子・柴坂寿子・佐治由美子・菊地知子・塩崎美穂である。

〔お詫びと訂正〕

本誌二月号および三月号に、表記の誤りがありました。
お詫びして訂正いたします。

二月号 p. 58 二〇〇八→二〇〇九

p. 59 佐藤キミオ→佐藤キミ男
板野正儀→板野昌儀

三月号 p. 58 二〇〇八→二〇〇九

編集後記

人間の寿命で考えれば、「天寿を全う」などと言われるかもしれない109年の年月を『幼児の教育』は生きてきました。しかし人生とは違って、本誌は何人何十人もの編集者の手から手へと引き継がれ、幾人もの人生と幾つもの世代を生き抜いてきました。天寿などというものがあるのかどうか、時どき考えます。

村田先生へのインタビューを通して、歴史上の人物倉橋惣三は、打ち解けて話したくなる一人の身近な人になります。阿部先生は戦前の本誌資料を通して、倉橋と一緒に散歩するかのようです。歴史を踏まえることは、人と人が変化し育ち合う関係に似ていて、いまの保育実践研究と自然と響き合うのではないか——こんなことを考えつつ110年目の準備を始めます。(H)

幼児の教育 第109巻 第5号

平成22年 5月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集担当 金子めぐみ・田中恭子
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円 (本体524円)
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館
表紙絵 後宮ひろみ
扉題字 津守 眞
本文カット 田崎トシ子
編集スタッフ 高橋陽子
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う 6

「何にもしない」

林 健造・江波淳子・菊地知子

・幼稚園の源流を求める旅(4) 国吉 栄

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開が始まりました!

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。

明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。ご意見ご感想などは、youjimap@yahooc.co.jpまでお寄せ下さい。

毎日の保育をより楽しく演出!

楽しく保育室を飾るために

春夏秋冬、季節ごと、年間を通して
使えるアイデア満載

誕生表&壁面アイデア

あかま あきこ、いしかわ まりこ、いわいざこ まゆ、
大橋文男、尾田芳子、小沼かおる、島田明美/著

バリエーション豊かな誕生表と、季節の行事に応じた壁面を紹介。かんたん型紙と工作テクニック集で、製作もラクラク。

26×21cm 96ページ 定価 1,890円(税込)



10915



0・1・2歳のあそびと環境



10916

五感を育てる環境作りに

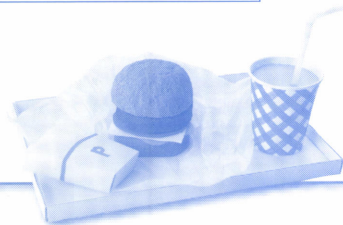
身近にある素材を利用して手作りする、あたたかな環境

0・1・2歳のあそびと環境

寺西恵子/デザイン

乳児の環境に必要なあたたかい雰囲気作りを応援! 簡単にできる手作りおもちゃや室内装飾を紹介。

26×21cm 96ページ 定価 1,890円(税込)



好評発売中

フレーベル館から新しい月刊保育誌が誕生!

園の未来をデザインする

保育ナビ

理事長、園長、副園長、主任など、保育現場をマネジメントするすべての保育者のための月刊保育誌が誕生しました。

文部科学省や厚生労働省の動向など、保育を取りまく政策レベルの話題を含め、これから園の未来を担う保育者にとって必要性の高い情報を、わかりやすく紹介します。

26×19 cm 80 ページ 定価 950 円 (税込)



① 他園の様子がよくわかる 「第1 特集」500人アンケート&座談会 「第2 特集」実践報告

4月号のテーマは「選ばれる園になるために」。少子化の中、今後の園のあり方を考えます。

5月号「子育て支援」、6月号「感染症」です。その他、「研修のあり方」「評価と公表」「保護者対応」などのテーマを取りあげます。



③ グラビアページ 園の旅 ～伝統園をたずねて

全国60か所以上の保育風景を撮影してきたカメラマン・渡辺悟が、各地の歴史ある園をたずねます。園舎や子どもたちが生活する姿から、園の歩みが感じ取れます。

4月号は、お茶の水女子大学附属幼稚園です。



② 園経営に直結する情報満載

《保育コンサル》
「園経営の扉をひらく! 保育マネジメント講座」
《保育最前線》
「国の動きを読む! 研究者の目」
《保育アラカルト》
「ソーシャルワーカーの園支援ノートから」など

園のマネジメントを考える上で欠かせない「予算」や「人」の管理、行政の動きなどを、《保育コンサル》《保育最前線》《保育アラカルト》のコーナーに分け、わかりやすくお伝えします。



年間購読

『保育ナビ』を1年間お買い求めいただく場合は、年間購読をおすすめ致します。詳しくは、下記までお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

定価 五五〇円(本体五二四円)☆